

春の装い (角光嘯堂)

短歌

花桜朝日に匂うみよし野の

桜吹雪の春の夕暮

春爛

香雪

繚乱の

時

優雅

風月

水流

隠かなり

詩情

閑寂

花月に

慕しみ

生氣

愛養す

紅天の

春

作者略歴

京都壬生の儒家に明治二十四年十二月十一日に生まれ  
た。九州小倉中学を経て九州大学国文科を卒業。漢学を大分日田  
の広瀬淡窓の塾で研究し、その後、二十年間、日本大学国文学の  
教授を勤めた。全国朗吟文化協会初代会長、淡窓流宜園調宗家・  
家元で文学博士。

解説

優雅な春を詠った詩。

語釈 ※春爛Ⅱ春になって花が咲き乱れる様子。 ※香雪Ⅱ梅の別  
称。 ※繚乱Ⅱ花などが咲きみだれること。 ※優雅Ⅱ気品のすぐれ  
ていること。 ※詩情Ⅱ詩のもっている情趣。 ※閑寂Ⅱさびしくひつ  
そりとしていること。 閑静。 ※生氣Ⅱいきいきした勢い。

※愛養Ⅱ大切に育てること。 ※紅天Ⅱ紅色の天。 ※Ⅱ※Ⅱ

通釈 春になって梅の花が咲き乱れる時、風、月、水の流れが優  
雅な一時を与えてくれる。春の花月は詩情豊かで閑寂の趣きがあ  
り、生き生きとしている。天を見ると紅色に輝きわたり、この春  
を大切にしようとおもえる。